

中国春蘭

中村祥二（会長）

東洋の花香の頂点に立つの中国春蘭

花の香りはその姿と同様に多様である。地球上の土地それぞれの気候風土にあった植物が、その命の輝きの頂点で花を咲かせ、様々な香りを放っている。人はいつも花の快い香りを求め、めでてきた。それぞれの地域には長い歴史に育まれてきた独自の園芸文化があり、花の香りについての考え方、感じ方、味わい方も異なっている。

ラン科シンビジウム属の東洋蘭は中国、朝鮮半島、日本に広く分布する。中国産の種を中国春蘭と呼んでいる。中国春蘭は芳香が強いのが特徴である。中国春蘭は一茎一花ともいわれ、主に東シナ海沿岸の主に浙江省、江蘇省の低い山で採取又は選別されて、長年にわたって銘品が蓄積されてきている。香りのよい代表的な銘品には‘白雲’‘冠雪’‘緑雲’などがある。1つの茎にたくさんの花をつける一茎九花 *Cym. faberi* と日本の寒蘭 *Cym. kanran* は共通の同じ芳香を持っている。



白雲 撮影 城市篤氏



大一品 寿楽園提供

一茎九花‘大一品’の香り

4月、薄緑色に開花した一茎九花の‘大一品’の鉢を家に取り込むと、部屋中が香る。香りは部屋からあふれて外まで広がってくる。2階にまで届く。そればかりでなく、さぞ香りが強かろうと思い、花に顔を近づけてかいでみると不思議なことに意外にそうでない。この蘭は約285年前、中国の富陽の山から発見された。当時、蘇州の展示会に出品したところ、みな「大一品なり」と賞賛したのでこの名前がついた。一茎九花の大輪の名花である。

私たちは、1988年‘大一品’37鉢を用いて、鉢に植えた状態の生花から香気成分をヘッドスペース分析すると同時に、475個の花から、0.01gの香料成分を抽出して分析した。蘭の専門家の協力もえながらこれらの分析結果と花の香りを注意深く比較した結果、Methyl epijasmonate が花の香りをよく表しており、最も重要な香気成分であることが分った。

中国春蘭の一茎一花‘宗梅’と寒蘭‘白珠’についてのヘッドスペース分析を行ったところ Methyl epijasmone とその類縁の成分を見出した。これ等の化合物が中国春蘭、一茎九花、寒蘭の香りのキ成分であることが分った。

香りが遠くから自然に広がってくるのは素晴らしい。それもすがすがしく、さわやかで気品がある香りで、東洋蘭の香りに出会うたびに、古来、人が蘭に魅了されつづけてきたことがわかる。ジャスミン、スズランとさわやかなレモンを併せ持つ甘さの中にもさわやかさを持つ透明感のある香りを放つ。濁りのない清らかでしみ通るような芳香は東洋の花の頂点に立っている。

花香の主要成分 Methyl epijasmone を「におい紙」の細長い試香紙の先につけておくと、1週間も10日もよい香りが漂いつづける。この香りをできるだけ多くの人に識って欲しいといつも思う。2月に毎年開かれる東京ドームの世界蘭展日本大賞の東洋蘭のフレグランス・コーナーはこの香りで包まれる。

孔子が花は控えめだが、香りが高いことに感じて「猗蘭操」という琴曲の詩を残したことで知られている。

中国の紀元前5世紀初頭、周王朝の支配体制がくずれ、晋・魏・趙などの諸侯の対立抗争が激化する春秋末の動乱期に、孔子は新しい説を唱え諸侯を歴訪して自分を国政に用いるように求めたが、政情は厳しく、諸侯は任用することをしなかった。孔子は失意のうちに生まれ故郷の魯（山東省）に帰る途中、花は控えめだが、香りが高い蘭にであい、それに感じて「猗蘭操」という詩を残した。

「隠谷の中に香りの良い蘭の独り茂る」のを見かけて、「蘭はまさに王者の香り」だという。誰にも認められず、他のつまらない花と一緒にいながら、芳香を放つ姿に、自らの不遇の境遇を重ね合わせて詠んだものである。

中国には、孔子の儒教の教えと結びついて、花の姿はたとえ慎ましくても香りを大切にするという園芸文化の風土がある。

作家の陳舜臣さんは、随筆「蘭におもう」の中で、中国では香りこそ花の心であるといい、蘭と薫の関係について、こう述べている。「植物では蘭、動物系のもものでは麝香が、においの世界の両横綱で、あわせて蘭麝の香りとたたえられてきた。植物にかぎっていえば、やはり蘭と菊が双璧であろう。……高い香りを発することを『薫』というが、薫育、薫化、薫陶といった用例をみると、どこからともなく漂ってくるかおりは、昔から教育の理想と考えられていたようだ。」

参考文献：大漢和辞典 vol.7 諸橋轍次 1958